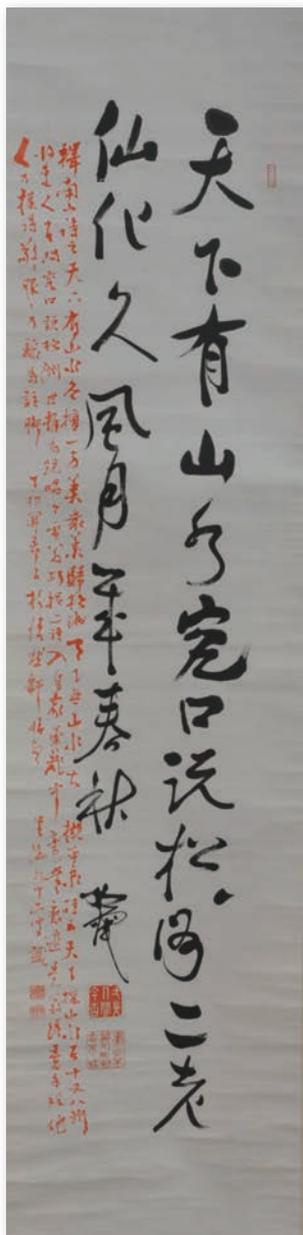


基本情報 ■作者：大槻如電(1845～1931) ■年代：明治～大正時代

■寸法：縦200cm 横52cm



**この資料のココがすごい!!**  
詩を引用されている南山古梁、大槻平泉、赤字の文章を書いた人物、そして作者の大槻如電。たくさん的人物が関わっている作品です。

**お気に入りポイント**  
赤字の文章を書いた謎の人物の存在が興味深いです!



学芸研究員  
森 千可子

学芸研究員の目

作者の大槻如電は、博識で和漢洋の学に通じていました。研究は歴史・地理から演劇・歌舞音曲に及び、脚本・劇評の執筆、舞踊の作詞作曲・振付けもおこなっています。そんな大槻如電のこの作品は、全貌が分かっていないので大変興味深いです。



多才な学者・大槻如電の謎多き作品

作者・大槻如電とは?

明治～大正時代の学者、大槻如電(おおつきによでん、じょでんとも)。仙台藩士大槻磐溪の二男、同文彦の兄であり、名は清修、字は念卿、通称は修二。維新後は海軍兵学寮、文部省に奉職し、明治7年(1874)に辞官した。如電は和漢洋学から文芸、音楽、舞踊まで博学多才であり、著に「日本教育史」、「洋楽年表」などがある。

作品について

作品には、

天下有山水究口説  
松洲二老  
仙化久風月 ■ 春秋  
如電

と書かれている。

詩中の「天下有山水」は江戸時代後期の禅僧・漢詩人で仙台的瑞鳳寺<sup>\*1</sup>に住んだ南山古梁(なんざんこりょう)の詩である。「究口説松洲」は江戸時代の儒学者であり、仙台藩に仕え、養賢堂<sup>\*2</sup>の学頭を務めた大槻平泉(おおつきへいせん)の詩である。「松島之詩」はこれらを引用して書かれた詩であり、掛軸の左端に書かれた赤字の文

章に「南山詩〜」、「大槻平泉詩〜」と書かれていることから、2人の詩を引用したということが分かる。また、南山、平泉の詩にはそれぞれ「松洲」という文字がある。これは現在の松島のことを指し、さらに「松洲」は如電が書いた詩の中にもあるため、この詩が「松島之詩」と呼ばれたと考えられる。

また、赤字の文章には「丁卯(ひのと)」、「六十二」とある。「丁卯」は明治3年(1867)もしくは昭和2年(1927)を指すと思われ、「六十二」は62歳のことを指し、明治3年(1867)か昭和2年(1927)の時、62歳であった人物が赤字の文章を書いたと考えられる。ただし、明治3年(1867)の時に22歳、昭和2年(1927)の時は82歳のため、如電の書いたものではないと思われる。さらに、「電翁」という文字があり、「翁」という言葉は自分の尊敬する人物に使う言葉であるため、赤字の文章は如電を尊敬する人物によって書かれたと考えられる。

学芸研究員 森 千可子  
実習生 梅宮 崇成

用語解説 詳しくはP27へ

\*1 瑞鳳寺  
\*2 養賢堂